Sr. M. Kobayashi
R. Galvão Bueno, 407
Nesta

ブラジル朝日新聞
伯國聖市マエストロカルチン街一一〇九
ブラジル朝日新聞社
本紙定價年六十ミル
外國郵稅共百廿ミル

新作戰練る獨伊兩巨頭

地中海攻勢の秘策と 英本土攻擊に決定版

第二次大戰以來の重要會談

（ニューヨーク十九日同盟）當地に達したチューリツヒドイツ筋の情報によればヒトラー、ムソリーニ兩巨頭重要會談は十九日行はれたものと信ぜられる、たゞし兩巨頭會見の情報が流布されると同時にイタリア政府は國外との電信電話連絡を遮斷し、ドイツ政府もまた一切口を緘してゐるため會見の場所その他は一切不明である（寫眞は向つて右ヒトラー總統左ムソリーニ首相）

【ベルン＝瑞西十八日UP】ヒトラー總統とムソリーニ首相の兩巨頭は明日第二次大戰勃發以來最重要な會見を行ふものと見られるが、會見場所は恐らくミュンヘン乃至ザルツブルグのうちと見られ、會談の目的は地中海方面戰局に對する今後の方策にありとされ一方また英本土攻擊についてもも最後的決定策を協議するものといはれる

【ベルン十八日英U】ヒ總統とムソリーニ首相兩巨頭會談に際し、フランス側よりダルラン海相ならびにアンチジェ陸相も出席するとの傳へられるが目下のところ右に對する確報はない

國が果して政府側の主張する如き切迫した危機に直面してゐるか否かは別としても非常時氣分は託に米國輿論に浸透してゐるので、これをバックとする政府側の立場は頗る有利で、たとへ該法案に多少の修正は加へられても議會を通過することだけは確實だと見る向きが依然有力である、しかして同法案の審議第二週にはケネディ駐英大使、リンドバーグ大佐、社會黨のノーマン・トマス氏らの法案反對論者が證人に立つことになつてをり、贊成派と激烈な論爭が繰り返されることゝならうが

援英の贊否兩論戰 いよ〳〵白熱化す

捗らぬ武器援助法案審議

【ニューヨーク十九日同盟】さる十五日から下院外交委員會に提出された武器援助法案は四日間にわたる白熱的論議を展開した後第一週の幕を閉じたが、この四日間の公聽會の經過を見るに政府側承認の統明に對して反對派の攻擊は豫想以上に猛烈で同法案の審議、論戰を通じ政府側の主張する主なる點は

一、あらゆる對策の實施に當り第一必要とするのはスピードであり、刻々變化しつゝある情況のもとでは一々議會の承認を得ることはほとんど不可能である、故に大統領に廣汎な權限を與へるも已むなし

一、英國こそ米國防の第一線であり英國を援助するのは結局米國から戰爭を遠ざけるものであるといふにあり、これに對し反對派は

一、この法案の成立により大統領は事實上獨裁者的權限を掌握し米國の民主々義を破壞す

一、法案は結局米國を戰爭に追ひやる

旨主張してゐる、しかして米

チアノ外相はじめ 伊閣僚ら軍隊入り

實踐躬行國民の士氣を鼓舞

【ニューヨーク十八日同盟】ヘラルド・トリビューン紙ローマ電によれば、チアノ伊外相以下數名の閣僚は近くそれ〴〵現職を辭し軍隊に入る決意を固めたといはれ、チアノ伊外相は航空隊に入隊するはづで、後任外相は補充しない模樣である、なほチアノ外相以下が今回かゝる決意を固めるに至つたのは實踐躬行をもつてイタリア國民の士氣を鼓舞するにあるといはれてゐる（寫眞はチアノ外相）

休會明けを前に 對議會態勢成る

貴衆兩院のプロ決定

【東京十九日同盟】休會明けを廿一日に控へ衆議院では翼贊議會の實務をモットーとする翼贊議會の實務を決議して對議會態度を明示した、一方貴族院も各派交渉會において「自粛協力、貴族院保全の面目發揮」を申し合せると共に翼贊體制の基礎たる貴族院部の創立總會を開き、三百十三名、全員一致、大政翼贊に邁進することを申合せ、こゝに政府ならびに貴衆兩院の對議會態勢は全く整備された、しかして議會再開の廿一日には例年通り午前十時まづ貴族院本會議を開き近衛首相の施政方針演說、松岡外相の外交方針演說、東條陸相、及川海相の戰況一般報告が行はれ、終つて政府は全議員に對し約一時間半にわたりわが國が現下直面する軍大時局の眞相を說明せしめ、これが協力を求めるため秘密會を要求、近衛首相、東條陸相、及川海相より過般各界代表者を招じてなしたると同樣時局の眞相を率直に吐露して全員の協力を懇請、國務大臣に對する質問は翌日に延期して散會、一方衆議院は午後一時本會議を開き近衛首相、松岡外相の演說につゞいて河田藏相の財政方針演說、東條陸相、及川海相の戰況報告のち秘密會に入り、貴院同樣首相、陸相、海相の說明ならびに協力懇請あり、再び會議を公開して議事に入り安部磯雄氏の議員辭任の件を承認、故望月圭介氏に對する徹弔を左し質問を翌日に讓つて夕刻散會することゝなつてゐる

議員定數は四百名 一府縣一選擧區へ

選擧法改正の主要點

【東京十九日同盟】翼贊會體制確立の礎石たる衆議院議員選擧法改正案は十九日夜の臨時閣議で正式に決定したので政府は同夜、更同法改正要旨を發表した、今回の改正は劃期的な全文改正であるため衆文整理および改正に伴ふ關係勅令案の立案調整などになほ遺された部分があるので樞密院に御諮詢奏請の手續きをとるのは兩三日後になる見込みである、改正の主要點は左の如くである

一、議員定數は四百人とす

一、府縣一選擧區とす、たゞし東京府、大阪府、兵庫縣愛知縣、福岡縣および北海道については二乃至四の選擧區に分つ

一、選擧權者は滿廿五才以上の男子たる戶主とす

一、政務官を廢止し參政官を置くことゝす

獨立生計を營む 廿五才以上の戶主

司法省、要綱を發表

【東京十九日同盟】戶主選擧制を眼目とする選擧法改正に對應し司法省では選擧權獲得のための分家を排除するため現行民法中分家に關する部分を改正し分家の條件として獨立の生計を營み得るものたること

獨立の生計を營み得るものたること

改正要綱原案を作成同要綱は十九日夜の臨時閣議において選擧法改正案とゝもに正式決定した

米、カナダを通じ 對英援助案促進へ

カナダ向け輸出に特典

【ワシントン十九日同盟】ルーズベルト大統領は十五日國防計畫の遂行上嚴重な輸出統制を要せぬ特定物資の輸出に對し一般許可狀の發行を認め大統領令に署名したが、國務省は十八日カナダ向輸出物資に限り最初の一般輸出許可狀發行に關する大統領令は國務省つて對英援助案促進を目的とするものであることが明確メ

國共分裂の徵

蔣介石政權下の國民黨と中國共產黨との合作は元來抗日意識を共通した點で連繫してゐたいはゞ一時の合せものに過ぎなかつたといつてよく、遲かれ早かれ、國共何れか一方の敗退が想像されてゐたのであつたが、同盟その他各通信の報道によると、どうやら國共の分裂は最早決定的なものであるらしく、しかも國民黨側から先手をうつて共產黨側にクーデターを斷行、新四軍長葉挺を逮捕しその軍に解散を命じたといふから、重慶にあつて政治活動を行つてゐた中共要人の運命なども恐らく危いのではなからうか、西安事件で中共の手に落ちた蔣介石がその强要によつて抗日戰線を展開したことは疑ふべくもない事實、それが四年にわたる敗戰を經て中共の志すところむしろ中華の全面的赤化にあることが露骨に示されて來た今日では、蔣が抗日の面子をたてゝ下野外遊といふ芝居を打つのではなからうか、その筋書作成には汪政權も日本も參加してゐるのではないか、とまれ、あれだけ腐れ縁の深かつた中共を拳をもつて絕つといふのであるからもちつとやそつとのことは明かである

トピック解剖

身のため中共側に彈壓を加へる必要あるは自然であつて、さらに想像と忖度を逞しうすれば、中共と絕緣これ幸潰滅したる後、汪政權と妥協して抗日戰を解消しそ

時局一般

伊希戰線ではイタリア側の不振を挽回するためドイツが援軍を派遣するとの說が傳へられ、既にその空軍は伊空軍を援けて地中海に活動を開始しその戰果また顯著なものがある、ヒトラーとムツソリーニは又亦極秘裡に會見、何事かを協議したと

極東のバルカン注視の的

タイ、佛印の國境紛爭 和平解決はまづ至難

英側早くも暗躍を開始

（バンコック廿日同盟）佛印國境紛爭事件勃發以來タイ國をめぐる國際情勢は各國關心的となり、就中英國側の暗躍は注目すべきものあり、タイ國內部の動向も大體次の如く微妙なる情勢を孕んでゐる

英國側の動向

最近はタイ、佛印問題にも積極的に働きかける氣配を示し、タイ軍を佛印國境に集中率制しピルマ、馬來國境方面の負擔を輕くせんとする魂膽なること明かで、金融的にもロンドンにある米國所有外資の米ドルへの乘換へを制限し外交、經濟方面から日本依存の傾向を牽制せんとしてゐる、タイ政府の要人連の多くが英國留學の親英派であるため英側はこの方面必死となつて勢力の保存工作を行つてゐる

國境戰況

本年に入つてよりタイ軍の行動は俄然活潑化し、ポアペの占領を始めとし國境線を突破佛印領內へ進擊するなど優勢を持續してゐる、前線にあるタイ、佛印兵力はラオス國境に三、四万程度で、カンボヂヤ地方の比較的少數の部隊により交戰が續けられてゐるが、同地方は千古の密林で敵と戰ふ前に密林を開き猛獸、大蛇と戰はねばならぬといふ實情であり、ビアンチアン、タケツク、サバナケツトも

雲南省
ルビー
スオラ
ムアン（寧）
ビエンチアン
ルアンプラバン
ムコンボ
アチボムカ
ウドン
ムクダハン
ムアンパツサク
ムアンサラカム
ムアンヤソトン
ムアンウボン
ムアンチャムパサク
ムアンクラチエ
ムアンパツタンボン
ムアンパツタンボン
ムアンパツタンボン

お土産もどつさり

中堅青年養成講習會閉づ

歸る"土の若人"たち

全伯各地の農村中堅青年を集めみつちり土の精神を植えつけ次の時代を背負ふ指導者として送り出さうと去る六日より二週間コチア小學校で產組中央會主催で開かれた全伯邦人中堅青年養成講習會は昨日午後二時半多大の收穫を擧げて幕を閉ぢた

七十餘名の各地より選ばれた講習生達は實習に學科に精神修養に短時日であつたが火の如き熱意で終始、天晴れ指導者としての資格を身につけ各地へ歸ることゝなつた

空だ！男のゆくところ

伯國に……

航空省新設さる

空の大臣にサルガード・フイリヨ氏

これからは空の時代だと言はれる位世界各國擧げて空軍建設へ、航空路の擴張へと乘出してゐるが、ブラジルにおいても最近いちぢるしい進歩を遂げつゝある折柄二十日付大統領令によつて新たらしく航空省が設けられた

初代空相には前勞働大臣、また訪日經濟使節團長として邦人とも馴染みのサルガード・フイーリヨ氏が任命された、なほ次官にはエスピリツト・サント・カルドーソ大佐が有力視されてゐる

病院が悲鳴！

昨年中のジユケリー行き三千百二十九名

最近ジユケリー腦病院より發表された統計によると昨年一ケ年間の同病院收容患者數は三千百二十九名に上つてゐるが、これを各月別に見ると次の通りである

一月	三一三
二月	二六三
三月	二二六
四月	二六〇
五月	二六一
六月	三四三
七月	二九〇
八月	二八七
九月	二七六
十月	二三六
十一月	二六八
十二月	二〇六

この表でみると一年中で最も患者の多い月は六月で次いで一月、何れも三百名以上を數へてゐる、それ以外の月では七、八、九月の順序で寒い時節に多いといふことになる、この頃は田舍では農作物の收穫も一段落ついて所謂農閑期に當り氣分も落ちついてヤレヤレと思つてゐるうちに氣が狂ふのではあるまいか

球界のニュース一纏め參らせ候

田川・松井さんを"球"で送る

去る十九日午後二時より濱市野球クラブ主催で來る一月三十一日のもんてびでお丸で歸國する田川、松井兩氏の送別野球が催された、田川さんの始球に續き同クラブ新進軍對OB軍の一戰が行はれたが新進軍陣容不備でエラー續出十六對四で大敗したが、試合は終始極めて和やかに進められお客さんの皆の兩氏は御自慢の十六ミリなんかをかついで最後の思ひ出となる野球戰や當日は對ベンナポリス、對リンスの野球戰を午前と午後に擧行の豫定で宿敵兩チームを選手達を撮すなど微笑ましい風景を描き出してゐた

試合後送別の挨拶を交し乾杯して夕陽を浴びて歡送した

プロミツソンに野球場落成

プロミツソン野球倶樂部では三コント也で今般野球場を購入し來る二十六日盛大に野球場開きをすることになつた、

文化優勝す

汎パラグワス大會

先日ソロ線パラグワスー驛同地青年聯盟主催の野球大會が擧行された、參加チームは文化、太陽、黑岩、リベロン、カラムル、マラカイ、パラグワスー、ライオン、ルテシアの九チーム參加といふ豪勢さで文化が輝く覇權を握つた、ホームグラウンドに迎へて粉碎すべく齋藤投手を中心に猛練習中である

（寫眞上は田川、松井兩氏の送別、中は落成したプロミツソン球場、下は始球する田川氏）

カラムル十七　太陽五
文化十四　リベロン三
パラグワス大　マラカイ三
文化三　カラムル〇
パラグワス五　黑岩二

▲優勝戰
文化十三　パラグワスー三
▲個人賞　打擊　松永（文化）
守備　矢田部（文化）美技小島（文化）

▲第一日　黑岩七ライオン六
▲第二日準々決勝
パラグワス大　マラカイ三
準決勝　化三　カラムル〇
文　パラグワス五　黑　岩二

▲準決勝—A組宮地（ハ）×藤平（ニ）、B組水上（ニ）×長谷川（ニ）
▲決勝—水上（ニ）×宮地（ハ）
▲順位—1水上2宮地3藤平4長谷川

昨年中に……

檢擧された泥的の數

巧妙になつた窃盜犯の手口

世に盜の算盤と盜人の種はつきまじ……石川五右衛門氏のセリフじやないが、昨年中聖市警察窃盜犯課に擧げられた窃盜件數は八百十九件に上つた、窃盜犯課は最近の盜賊連が中々利口になつて犯跡を殘さぬので非常な苦心を拂つて犯人を檢擧し、同課は聖市警察で最も難しい

一千六十七人

聖州陸上競技聯盟から本年度各種公式陸上大會が發表されたが、そのうち邦人と關係ある主なるものを擧げると次の通りで全伯邦人大會は九月六、七の兩日、日伯對抗は九月十三、十四兩日となつて居る

競技會	期日	場所
エストレアンテ少年オリンピック	四月十三日	チエテ
ノビシモ	五月自一日至四日	ゼルマニア
ジユニオル	五月十一日	パウリスターノ
アデマル・バロス杯	六月十五日	チエテ
爭奪	七月五日、六日	バカエンブ
在伯邦人	九月六日、七日	チエテ
日伯對抗	九月十三日、十四日	チエテ
州大會（第一部前半）	九月廿一日	チエテ
州大會（第二部）	九月廿八日	チエテ
州大會（第一部後半）	十月五日	チエテ
州大會（十種競技）	十月十八、十九日	チエテ

さあ目標は決つたゾ！

全伯陸上・九月六、七日
日伯對抗・同十三、十四日

在伯邦人の姿態

（5）

ペレン領事館の昨年十月一日現在調査によると管內邦人數は戶數三五〇、本業者男二四〇名、女二三名これらに扶養される家族が男二四〇名、女四二〇名、合計一、〇二九名となつてゐるが、人口の增減を前年同期と比較すると增加はペレン市の四八名ジユツタ景氣のアマゾナス州パリンチンス附近の四六名でその他は減少、全體では四三名の減少となつてゐる、なほ各地別にすると次の通り

▲パラー州ペレン市

本業者	家族
男	五六〇
女	一三三
合計	一八二
戶數	五七

▲ペレン市を除くパラー州

男	一〇八
女	一〇一
合計	二〇九
戶數	三七八

▲アマゾナス州パリンチンス附近

男	一〇八
女	一〇四
合計	二一二
戶數	四六

▲パリンチンスを除くアマゾナス州

男	六七
女	一
合計	六八
戶數	一

▲アクレ直轄州

男	四〇〇
女	〇
合計	四〇〇
戶數	四

▲マラニヨン州

男	一〇〇
女	一
合計	一〇一
戶數	二

減る一方・北伯の邦人

集團の最高は

ジユツタ景氣のパリンチンス附近

南鄕杯爭奪ゴルフ

東山の水上氏優勝

既報、南鄕杯爭奪ゴルフ試合は去る十九日の日曜日クベサリヤ・ゴルフリンクで擧行されたが、東山の水上氏が優勝した、職績次の通り、括孤內は八ハンデイ

◎準決勝—A組宮地（ハ）×藤平（ニ）、B組水上（ニ）×長谷川（ニ）
◎決勝—水上（ニ）×宮地（ハ）
◎順位—1水上2宮地3藤平4長谷川

アラサツーバ市日會定期總會

アラサツーバ市日本人會では去る九日同會事務所において四十二名の會員出席のもとに定期總會を開催、昭和十五年度事務及事業報告、會計報告の後役員の改選を行つた、新役員氏名左の通り

會長—勝田正通
副會長—髙橋鱗太郎
會計長—松本晃、梶本聰
會計—髙橋鱗太郎、菅山晋
外交—小松竹治、菅山晋
擧務—出利葉羊三、安田熊
衛生—一ノ澤勘助、佐々木仁三夫

ベンナポリス聯日會新役員決定

ベンナポリス聯合日本人會定期總會は一月六日會館に於て開催、本年度新役員が左の通り決定した、常任幹事として邦人郵便局長を兼任し獻身的に盡力してゐた代田喜市氏は今般一家を擧げてマリリヤ驛に移轉することになつた、後任はまだ決定してゐない

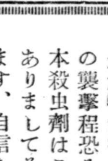
會長久保田福一、副會長下山政行、會計平田文雄、教育出赤金滅、外交平清次、產業丸井晋吉、衛生岡本忠勝、顧問甲斐清次郎

帳場街

◆…ビシヨ禁止や未成年者の玉突、昭和十二年四月三日に創立されその後自然消滅となつてゐた聖最近再興運動が行はれ去る十九日參集し二世女子を中心とする懇談會が開かれた

◆…ブラジル人でゐて日本語がペラ〳〵で日本語のしやれや冗談が下手な日本人はだしといふ、リオ日伯中央協會囑託のジヨゼ・サンタアンナ君は四ケ年の苦心の結晶として今度日本語參考書を出版することゝなつた、同書は勿論日本語を習ふ伯人には以て來いの良指導書だが、逆に日本人がブラジル語を習ふにも參考となる一擧兩得のもの、親日伯人へのプレゼンテには恰好だが、兎に角一伯人が獨學で日本語參考書を仕上げたのは充分偉とするに足る定價は一部廿ミル、申込先は日伯中央協會（郵函リオ三七一三）又は聖市キンゼノーベンブロ街六二番フレイタス・バストス書店か又は日伯社でも取次ぎをする

◆…歸伯した日伯產組中央會理事脇山さんの談によると毎週の產組中央會も今後極力應援することになり殊に先般訪伯した宮城氏が中央會總務部長になつてゐるので懸案の棉の輸出剝當なども好轉するでせうと



讓渡し

青物商、食料品、雜貨商又は洗濯業向、良好住宅付店鋪五ケ年契約の事、詳細は左記に

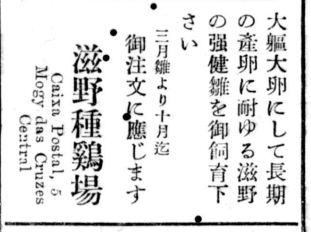
Rua Dr. Carvalho de Mendonça, 124
S. Paulo

大軀大卵にして長期の產卵に耐ゆる滋野の强健雛を御飼育下さい

三月雛より十月迄御注文に應じます

滋野種鷄場

Caixa Postal, 5
Mogy das Cruzes
Central



求貨物自動車運轉手

希望者はモヂ產組本部まで御來組願度

中央線モヂ・ダス・クルーゼス產業組合
運輸部

棉作者への福音!!

あぶら虫にはイマヅ殺虫劑

農產物が害虫の爲め蒙る損害は莫大なもので特に棉の幼樹時代に於けるあぶら虫の襲擊程恐る可きものはありません

本殺虫劑はこの被害から免かれる爲めに祖國に於て多年研究の結果造つたものでありましてその効果絕大な事は一度御使用になつた各地棉作者からの定評であります、自信を以つてお薦め致します、是非御試用あらん事を……

（使用法付）

販賣所　羽瀨商店
聖市郵函二一A

お願ひ

「ブラジル朝日新聞」の購讀御申込又は住所御移轉の節は左記樣式により御願ひ申上度候

姓名	日本字		
	伯字		
住所	自宅		
	送先		
	前住所		
日伯新聞ノ關係	舊讀者	左ノ方ヲ消シ下リリヤ	必要不レカ何ウチ
	新讀者		

ブラジル朝日新聞社
サンパウロ市郵函三七五
Tel. 8-2844
Jardim America

胃腸に
エビオス

求庭師

熟練せる園庭師を求む
住込の事、照會は午後一時迄
Rua Venezuela, 324

大阪商船發着廣告

日本へ

西阿丸（パナマ經由）	橫濱發	サントス發	一月十九日
あふりか丸（アフリカ經由）	神戶發	サントス着	三月十八日
もんてびで丸（パナマ經由）	橫濱發	サントス着	二月一日
まにら丸（アフリカ經由）	神戶發	サントス着	三月廿二日
南阿丸（パナマ經由）	神戶發	サントス着	二月八日
はわい丸（アフリカ・ブエノス經由）	神戶發	サントス着	三月廿七日
ぶえのす丸（パナマ經由）	橫濱發	サントス着	一月十六日
まにら丸（アフリカ・ブエノス經由）	神戶發	サントス着	二月十日
はわい丸（アフリカ・ブエノス經由）	神戶發	サントス着	三月廿四日
ぶえのす丸（パナマ經由）	橫濱發	サントス着	一月廿九日

日本より

西阿丸（パナマ經由）	サントス發	橫濱着	三月十九日
あふりか丸（アフリカ經由）	サントス發	神戶着	三月十八日
もんてびで丸（パナマ經由）	サントス發	橫濱着	三月廿二日
まにら丸（アフリカ經由）	サントス發	神戶着	三月廿七日
南阿丸（パナマ經由）	サントス發	神戶着	二月六日
はわい丸（アフリカ・ブエノス經由）	サントス發	神戶着	三月五日
ぶえのす丸（パナマ經由）	サントス着	橫濱着	三月十日

西阿丸及び南阿丸は一等船客のみ御引受申上可候
詳細は左記へ

サントス　伯國大阪商船會社
(Soc. de Navegação Osaka do Brasil Ltda.)
Rua Cidade de Toledo, 31 - Santos
聖市　伯國大阪商船會社聖市出張所
(Soc. de Navegação Osaka do Brasil Ltda.)
Rua Alvares Penteado, 200 - S. Paulo
リオ　WILSON, SONS & CO. LTD.
Avenida Rio Branco, 37 - Rio de Janeiro

Redacção e Administração
Rua Maestro Cardim, 1109
Teleph.: 7-3325 e 7-3326 - Cx. Postal 375
End. Telegraphico: "ASAHI"
SÃO PAULO - BRASIL

BRASIL ASAHI

DIRECTOR: José Yamashiro

ASSIGNATURAS:
PARA O BRASIL { Anno.... 60$000 / Semestre. 30$000
PARA O EXTERIOR - Anno.. 120$000
ANNUNCIOS — Temos á disposição dos interessados uma tabella completa de preços p/ annuncios nesta folha

Anno I | São Paulo — 3.a feira, 21 de Janeiro de 1941 | Num. 147

NOTAS E EDICTORIAES

O sr. Presidente Getulio Vargas seguiu, sabbado ultimo, para Petropolis, em companhia do coronel Benjamin Vargas e capitães Heraclides Fontella e Francisco Mattos Vanique, para fazer a sua habitual estação de veraneio.

O Chefe da Nação foi recebido no Palacio Rio Negro pelo general Francisco José Pinto, chefe do gabinete militar da Presidencia, interventor Amaral Peixoto e senhora, e outras altas auctoridades federaes, estadoaes e municipaes.

***

O sr. Souza Costa, ministro da Fazenda, seguiu sabbado para São Lourenço, em companhia de sua familia.

O titular da Pasta da Fazenda permanecerá alguns dias naquella cidade.

***

Encerrou-se ante-hontem, após um mez de intenso movimento, a Primeira Exposição Nacional do Livro e das Artes Graphicas, organizada pela Universidade de São Paulo, em commemoração ao Quinto Centenario de Guttenberg e da Imprensa.

***

O Governo do Estado de São Paulo e a Prefeitura da Capital, com a collaboração da Segunda Região Militar e do Arcebispado, commemorará solennemente o 387.° anniversario da fundação da cidade que transcorre no proximo dia 25 de janeiro.

***

Encontra-se, desde sabbado, em São Paulo, o sr. S. Hosokawa, funccionario da embaixada japoneza de Buenos Ayres. S. S. regressará ao Japão a bordo do "Montevideo Maru", cuja partida está marcada para 1 de Fevereiro proximo.

***

"Um desfio interessante mobilizou, nos ultimos dias do anno passado, em Porto Alegre, numerosos estudantes em ferias, desoccupados effectivos ou occasionaes, moços e velhos em folga. Tratava-se de descobrir, entre as dezenas de milhares dos domicilios existentes na capital gaucha, os que não tivessem sido recenseados.

A Delegacia Regional do Serviço Nacional de Recenseamento no Rio Grande do Sul pagaria 10$000 por domicilio nessas condições.

A caça foi animada, embrenhando-se os caçadores de preferencia nas zonas de habitações mal situadas, de accesso ás vezes difficil.

Muitos suppunham conquistado o premio, trazendo indicações de ruas e numeros, onde, segundo affirmavam, não havia passado o recenseador.

Tinham, porém, de render-se á evidencia, pois lhes eram apresentados, sem tardança, os rostos dos questionarios alli preenchidos.

Não chegou a 200$000, emfim, a despesa da Delegacia Regional em Porto Alegre com os concurrentes, em troca, aliás, da certeza de que o censo demographico naquella cidade fôra o mais perfeito possivel.

Os poucos domicilios que appareceram não recenseados constituiram casos perfeitamente explicaveis, não significando, de nenhum modo, negligencia do pessoal censitario.

Só uma grande confiança nos trabalhos que lhe foram confiados animaria o responsavel pela execução do Recenseamento na capital gaucha a lançar tão significativo desafio. Foi uma attitude que, por si mesma e pelas suas consequencias, depõe expressivamente em favor do apparelho recenseador de 1940 e se junta a outras razões, igualmente fortes, de que já dispomos, para confiar integralmente na exactidão dos resultados que em breve serão apurados".

(Communicado do S. N. R.)

Seguiu para Tokyo o embaixador japonez junto ao governo da China

Shanghai, 17 (D.) — Deixou esta cidade, hoje ás 7 horas, a bordo do "Kamakura Maru", o snr. embaixador do Japão junto ao governo central da China. O embaixador Honda que regressará temporariamente ao seu paiz vae accompanhado dos snrs. Wakasugui, Yoshino, Shimizu e Kimura, altos funccionarios da embaixada.

Consta que a viagem do diplomata tem por fim conferenciar com as auctoridades de Tokyo sobre assumptos relativos á reforma dos estatutos da embaixada.

UM PARLAMENTO SEM PARTIDOS POLITICOS

O governo procura uma collaboração perfeita com a Dieta

Tokyo, 17 (D.) — O gabinete esteve reunido hoje á tarde, na residencia official do primeiro ministro, para tratar dos problemas concernentes ao periodo legislativo a reiniciar-se breve. O novo periodo da Dieta Imperial caracteriza-se por se tratar de um congresso sem partidos politicos e reveste-se de especial importancia, em vista da guerra. O governo quer dará Dieta um caracter de collaborador efficiente da politica imperial, e para alcançar tal objectivo é indispensavel um intimo entendimento entre o governo e as duas casas do Legislativo.

Coherente com sua orientação, o gabinete Konoye apresentará os 128 projectos de lei, organizados pelos varios departamentos governamentaes, quanto antes possivel á Dieta, afim de facilitar-lhe o exame e approvação dos mesmos. O ministerio, hoje reunido, resolveu ainda trabalhar activamente para tornar mais perfeita a coordenação dos trabalhos entre o governo e as camaras dos Representantes e Pares.

Tokyo, 17 (D.) — O governo vae apresentar mais de 100 projectos de lei no proximo periodo da Dieta Imperial, com o fito de fortalecer a organização politica, economica e cultural do paiz em tempo de guerra. Todos os projectos de lei em apreço são considerados de absoluta necessidade para o estabelecimento da nova ordem no paiz. São seguintes os principaes projectos, apresentados, pelos ministerios competentes:

Ministerio do Interior

1.° Projecto de lei sobre nova divisão administrativa das provincias.

2.° Projecto de lei sobre reforma do codigo eleitoral, e mais um projecto.

Ministerio da Fazenda

1.° Projecto de lei para emissão de apolices de divida publica, para cobrir as despezas do orçamento ordinario do corrente anno.

2.° Projecto de lei sobre reforma da lei n.° 84 de 1936 e mais 37 projectos.

Ministerio da Justiça

1.° Projecto de lei sobre reforma parcial do codigo civil e mais 12 projectos.

2.° Projecto de lei relativo á modificação parcial da lei da subvenção do estado no ensino obrigatorio e mais 4 projectos.

Ministerio da Agricultura e Florestas

1.° Projectos de lei referentes a companhia nacional da linha de seda.

2.° Projecto de lei sobre a intensificação da producção agricola e mais 6 projectos.

Ministerio do Commercio e Industria

1.° Projecto de lei sobre associações productoras e mais 17 projectos.

Ministerio das Communicações

1.° Projecto de lei sobre as emprezas de navegação.

2.° Projecto de lei referente á transformação da Companhia Toa de Navegação em empreza de caracter especial e mais 7 projectos.

Conferencia entre o Governo e o Estado Maior do Exercito e da Armada

Tokyo, 17 (D.) — Foi levada a effeito, dia 16 ás 11 horas, uma reunião entre o Governo e o Estado Maior para tratar varios problemas de grande importancia. Na sessão que foi realizada na residencia official do primeiro ministro Konoye, compareceram da parte do governo, o presidente do Conselho, principe Konoye e os ministros Hiranuma do Interior, Matsuoka do Exterior, Tôjô da Guerra, e Oikawa da Marinha. Representando o Estado Maior estiveram presentes, o general Suguiyama, chefe do Estado Maior e o general Konro, sub-chefe do Estado Maior da Armada.

A sessão, após debatidas varias questões, foi encerrada ao meio dia.

Presentes as mesmas pessoas, realizou-se, hoje, outra sessão que foi iniciada ás 9,10 hs. encerrando-se ás 10 hs. Consta ainda que essas sessões, entre os importantes orgãos, serão proseguidas nas 5.as feiras de cada semana.

Esboço da Litteratura Japoneza

YASUSHI URIU

(12)

A Historia de Genji

E foi então que veiu a "Historia de Genji" ("Genji Monogatari"), uma novella escripta por uma dama da côrte, Murasaki Shikibu, em alguma epoca entre 1008 e 1020. Tanto já se disse desta novella, que parece desnecessario nos demorarmos sobre ella com detalhe. E' sufficiente dizer que é a maior obra litteraria que o Japão jamais produziu, tanto em volume como em valor.

A historia desta novella é baseada sobre a vida da côrte, consistindo em 54 livros, narrando os episodios amorosos da vida do Principe Genji, de seu filho e de seu neto. O Principe era, de facto, tão extraordinariamente bello que "o povo o chamava *Hikaru Genji* ou Genji, o Resplandescente".

"Comquanto parecesse uma zombaria pôr uma creança tão linda em vestes masculinas", conta a "Historia", "elle tinha agora 12 annos de idade e o tempo para a sua iniciação tinha vindo. O Imperador dirigiu os preparativos com zelo e sem descanço e insistiu sobre a magnificencia além da que estava prescripta".

A cerimonia foi fixada e nesse dia Genji, tendo chegado á hora aprazada, teve "os seus longos anneis do cabello da infancia" substituidos "pela trança purpurea". Suas vestes tambem foram modificadas de accordo com a cerimonia, porém então, a despeito do temor geral de que as suas delicadas feições poderiam ser destruidas, "elle parecia mais bello do que nunca".

Aos 16 annos, ouvimol-o já discutindo o caracter feminino com alguns amigos. Esta discussão é chamada "a conversa de uma noite chuvosa", constituindo um capitulo celebre da "Historia". Aconteceu que, "numa noite, quando a chuva nunca cessava o seu triste cahir a cantaros", Genji senta-se quietamente em seu aposento, "contemplando varios livros e papeis". De subito, elle tira algumas cartas da gaveta de uma secretaria, despertando a curiosidade de seu jovem amigo, que insistia em vel-as. As cartas são, de facto, cartas-de-amor, e o seu conteudo versa a respeito de mulheres. Mais dois jovens depois se juntam á discussão e a conversação prosegue a noite toda, não trazendo nenhuma conclusão. Porém, durante o tempo todo, Genji, comquanto algumas vezes compartilhasse da palestra, fica pensando em uma pessôa somente, inteiramente convencido de que "não ha nenhuma como ella".

Em erudição, na verdade, ninguem podia exceder a Genji, tanto em profundeza como em rapidez, porém onde o seu genio era realmente sem parallelo era no namoro. Muito tem sido dito a respeito da moralidade de Genji, porém a historia é, apesar de tudo, uma descripção fiel da idade e do paiz em que viveu a auctora. Eis aqui uma passagem que descreve uma festa no palacio:

(Continúa)

As negociações economicas entre Tokyo e Batavia

Palavras do ministro das Finanças das Indias Hollandezas

Batavia, 16 (D.) — Em entrevista collectiva aos representantes da imprensa extrangeira, o ministro das Finanças do governo das Indias Hollandezas fez as seguintes declarações, salientando o desejo do seu governo de incentivar o commercio com o Japão:

"O governo das Indias Hollandezas não alimenta pretenções de conceder especiaes beneficios economicos a um determinado governo. O seu plano não soffrerá alterações mesmo com relação ao Japão, mas as actuaes conversações entre os dois governos caminham satisfactoriamente e nada ha, por ora, que possa embaraçar o andamento destas negociações. O governo das Indias Hollandezas deseja incrementar o seu commercio com o Japão mediante um accordo commercial a ser firmado breve.

O reinicio das negociações

Batavia, 16 (D.) — Proseguindo nas negociações iniciadas dia 15, o delegado especial de Tokyo, sr. Ishizawa, visitou hoje o chefe do Departamento de Commercio do governo das Indias Hollandezas, tendo-lhe entregue as novas condições do Japão referentes ao accordo commercial a ser assignado entre os dois governos.

Impressos?
Procure a typographia
NIPPAK-SHA
C. P. 375 — Teleph. 7-3325

O noticiario telegraphico publicado pelo "BRASIL ASAHI" é fornecido pela Agencia Dômei, japoneza.

A Protecção da Infancia no Oriente

(Conferencia realizada no Nippon Club, em 4 de Outubro de 1940)

3 — *João B. Dubieux*

Este acontecimento, sem importancia, pode servir para demonstrar o progredir consequente da miseria e do desamparo infantis.

Em COLOMBO, uma das principaes cidades de Ceylão, a mendicancia infantil é maior do que em Hong-Kong, e verdadeiras levas de crianças acompanham o turista, pelas ruas, a bater violentamente com a mão espalmada no ventre, implorando em inglês: HUNGER! HUNGER! (fome! fome!). O numero de mendigos infantis é assustador, e demonstra quanto maior é a miséria nessa região.

Os desoccupados adultos, os que vivem de expedientes, são igualmente sem numero. Apenas o turista desembarca, é assaltado por dois ou trez homens que insistem em auxilial-o, servindo-lhe de guia, de cicerone, de companheiro attencioso, ainda que impertinente, fazendo por nós, o cambio de moedas, o barateamento das mercadorias, a compra de sellos, e, afinal, acaba por pedir-nos algum dinheiro. Visto atravez de certo prisma, esses homens são uteis para o viajante, ainda que excessivamente importunos.

Em toda a região da cidade, os meninos não nos deixavam socegados e o eterno coro de FOME! FOME!, perdurava em nosso senso auditivo, até a intervenção de um dos nossos cicerones, que afugentava as crianças, puxando-lhes o cabello violentamente.

Certa vez, uma menina de nove a dez anos, com um menino, de um ou dois annos, acavallado num dos quadris, approximou-se de mim e pediu-me esmola, e, como eu titubeasse em dar-lhe a esportula, ella rapidamente, chegou-se a mim e falou-me num mau inglez, que já era mulher e desejava vender o seu corpo por um RUPEE (sete mil e duzentos réis, em moeda brasileira). Diante da minha surpreza, o homem que me servia de cicerone, entendeu exotal-a, e, lá se foi a criança a offerecer-se a outro viajante, quiçá, menos escrupuloso...

A quem devemos responsabilizar essa miseria, esse morbido estado social? Ao factor mesologico? A' ausencia da educação infantil? A' desattenção dos governos ás imprescindiveis necessidades infantis? — Cabe aos sociologos e aos pedagogos a resposta, porém, não me esquivarei de asseverar que, se a Metropole cuidasse um pouco mais da protecção da infancia, como cuida e dirige o commercio e a finança dos paizes coloniaes, a moral desses pequeninos infelizes estaria mais alevantada, e essas colonias, futuramente, possuiriam homens uteis á patria e, talvez, á propria Inglaterra. Todavia, os interesses immediatistas dos magnatas colonizadores não permittem qualquer elevação de moral, pelo contrario, preferem uma ethica rastejante, por ser mais malleavel, mais cega, mais conduzivel...

No MANDCHUKUO encontramos igualmente muitos meninos a pedir esmolas, ainda que, em lugares excusos, o que me fez suppôr, ser prohibida a mendicancia infantil nesse Imperio. A Mandchuria ainda lucta com grandes difficuldades para resolver o problema da infancia. As luctas intestinas muito vieram aggravar a desprotecção infantil. Após a separação da China, grande surto incrementador de instrucção surgiu e, já em 1933, o paiz possuia 9.156 escolas primarias, com 508.358 alumnos, e seus proceres determinavam, neste mesmo anno, a criação de 461 escolas para os filhos dos mongoes domiciliados no jovem Imperio. Cinco annos depois, em 1938, contava o Mandchukuo, com 12.063 escolas primarias, com 1.372.454 alumnos. As despezas com a educação em geral, que era em 1933, de 5.625.516 YUANS, passou a ser, em 1938, de 11.812.614 YUANS, dobrando consequentemente.

Além destes dados, poder-se-iam apresentar as despezas effectuadas pela SOUTH MANCHURIA RAILWAY, na manutenção de escolas na zona concedida, pelo paiz, a esta Ferrovia, de accordo com o Tratado de PORTSMOUTH, de 5 de setembro de 1905, assignado pela Russia Imperial, pelo Japão e pela China. Neste Tratado a peninsula de KWANTUNG, passaria á jurisdicção do Imperio do Sol Nascente e serviria de base para expansão da South Manchuria Railway. Esta, em 1937, possuia, na faixa que lhe foi cedida em territorio mandchú, 137 escolas primarias e 25 jardins de infancia.

E' interessante notar que, o ensino mandchú augmenta de intensidade na proporção que se approxima da peninsula de Kwantung, phenomeno este que determina a influencia cultural do povo japonez. Assim, a provincia de FENGTIEN (MUKDEN) possue 34 % das escolas mandchus e a provincia de KIRIN possue apenas 17 %. As escolas primarias são de quatro annos, porém, actualmente, criaram um novo systema, que ainda está em experiencia e ao qual se denomina THE NATIONAL MONOCLASS SCHOOL, que corresponde ás escolas isoladas do nosso paiz. Estas escolas são subvencionadas pelas municipalidades.

Em KWANTUNG ha cerca de 800 escolas primarias, sob a directa jurisdicção do KWANTUNG BUREAU alcançando 160.000 alumnos para uma população de ..... 1.680.000 vidas. As despezas totaes dessa região montam a 17.140.329 YENS, dos quaes 2.251.420 YENS foram gastos em manutenção das escolas. Em KWANTUNG não ha meninos vadios, nem mendigos infantis, excepto numa região encravada nas proximidades do bairro chinez da cidade de DAIREN; este lugar denominado LO-TAN que quer dizer "CÉU ABERTO", é composto de um aglomerado de casas de madeira, com estreitos beccos.

Continúa